

## 前回までのあらすじ

流遠るしおやみひめは、小学六年生の普通の女の子。  
学校があつて、友達がついて、好きな男の子がいる。

しかし、そんな平穏な生活は、とある少女との出会いで一変してしまう。

少女の名はツバキ・タカチホ。

彼女は地球とは別の星・惑星ゼヘナから来たという。

ツバキの目的は〈カタストロ〉と呼称される敵性体の殲滅せんめつであり、彼女はそのための存在——〈機獣少女きじゅう〉だった。

〈カタストロ〉を殲滅せんめつし、ツバキは故郷の惑星ゼヘナに帰り、やみひめは以前のように普通の生活に戻れると思っていた。

しかし世界は改変され、やみひめと橘たちばなアサト、そして友人のクラウ・P・ブランはゼヘナに転移してしまう。

あたかも、改変された世界から排除されるように……。

転移した先でツバキ達と再会したやみひめ、アサト、クラウの三人は、ゼヘナの置かれていた状況を知る。

〈カタストロ〉とは違う敵性体——〈ブレケース〉の襲来によって脅おびやかされていると。

それぞれに事情は違えど、彼等は〈ブレケース〉との戦いに加わる事を決めた。

それぞれの胸の内に、様々な想いを抱えながら。

そしてそれは、地球から来た三人だけの事ではなかった。

※登場人物紹介は[こちら](#)

機獣少女ゾイカルやみひめ *The NOVEL REVIVAL*

席を外していたカナコとツバキが談話室に戻ると、彼女等の代わりに定期報告に行っていたファフロウ姉妹が戻っていた。

茶色のショートヘアと、猫のような黄色い瞳をした、中学生くらいの小柄な少女が妹のベアトリーチェ・ファフロウ。その頭部には猫のような耳があり、腰の下からは尻尾しっぽも見える。

緩く波打つ銀色のセミロングと、神秘的な金色の瞳をした、高校生くらいの少女が姉のタオエン・ファフロウ。やはりその頭部には狐のような耳があり、腰の下にはもふもふの尻尾が見える。

「……………」

「あ。カナコにツバキちゃん、おかえ——にやあああつ!？」

件のベアトリーチェが素すつ頓とんきよう狂きやうな声を上げた。

カナコが無言で、彼女の尻尾を握ったからだ。

特徴と言えば長い黒髪くらいで、目立つ点は見当たらない。しかし、特徴がないというのは、マイナスとなる要素がないという意味でもある。けして派手ではないものの、その容貌ようぼうは隙なく整っており、東方大陸女性の清楚な美しさを表す『大和撫子』やまとなでしこを体現していた。

フルネームはカナコ・T・シングウジ。

高校二年生の《機獣少女》である。

「ごめんなさい。そんなに驚くとは思わなくて」

あまり悪びれているようには見えないが、カナコはベアトリーチェの尻尾から手を離すと、すぐに謝罪の言葉を告げた。

「もう、カナコのえっち！ 気軽に触っちゃ駄目なんだよ！」

「そうですよ、カナコさん」

警戒を露あらわにする妹の一步前に出て、姉のタオエンが言った。だが、カナコに注意をするのかと思いきや、タオエンは彼女に背を向け、自身の豊かな銀色の毛並みを見せつけるようにした。無論、髪ではなく尻尾の方だ。

「とても敏感な部分なので、もっと優しく触れてあげないといけません」

それはつまり、自分の尻尾なら触ってもいいという事なのだろう。タオエンの尻尾は、耳と同じく狐のようなそれなので、とても触り心地が良さそうだ。

だが——

「さあ、どうぞ」

「……………遠慮しておくわ」

カナコはタオエンの厚意——なのだろう——を辞退した。

「な、なぜです!？」

黙って無表情に佇たがずんでいるのが常のタオエンが、愕然とした。それこそ、世界の終わりでも告げられたかのように。

「あなたの百合趣味ゆりに巻き込まれそうだからよ」

実際、取り繕つくろってはいたようだが、タオエンがカナコに触れられる事を期待していたのは、表情に出ってしまったていた。無表情を維持しきれず、頬ほおは紅潮し、口元も緩み、ウズウズしていたのが明らかだったのだ。

タオエンは同性愛者という訳ではないのだろうが、女・性・同・士・の・友・情——いわゆる『百合』愛好家なのだ。その対象は血を分けた妹や、自分自身も例外ではない。

普段は寡黙な少女なのだが、『百合センサー』が反応すると途端とたんに自制心が薄れてしまう。なんというか、黙っていれば美少女な分、より残念さが増してしまう。

「そんな……」

「俺が触ろうか？」

失意の底に沈む銀髪の少女に、カナコとは別の声がかけられた。

この場にいる唯一の男性——橘たちばなアサトだ。

年齢に似合わぬ気怠けだるい雰囲気まじを纏った少年である。右手をわきわきと動かし、触る意思をアピールしているが、その無表情からは本気なのか判断が出来ない。

黒髪黒瞳。身長と体格も、東方大陸の平均的な高校三年生のそれだ。

しかし、彼はゼヘナの人間ではない。フアフロウ姉妹と同じ異邦人で、地球から転移して来たらしい。

そして——カナコの兄かもしれない少年。

「——寝言は寝て言ってください」

失意の底に沈んでいたはずのタオエンが、一瞬で浮上した。普段の無表情を取り戻し、拒絶の言葉を躊躇ちゆうちゆうなくアサトに浴びせた。口調こそ丁寧なままだが、明らかに熱いというものが感じられない、底冷えのする声で。

「アサト! そんなにタオエンさんの尻尾しっぽが触りたかったの!？」

アサトの発言に憤慨しているのは、長い黒髪をポニーテールにした少女だ。見た目通りの小学六年生といった容姿で、怒っているというより、むくれているように見える。

流遠るしおやみひめ。

彼と同じく、地球から来た異邦人である。

「ふふ。もちろん、場の空気を和ませるための冗談ですよね——橘さん?」

カナコの隣にいたはずの少女が、気付けば彼等のすぐ近くにいた。普段通りの澄まし顔で、普段通りの穏やかな口調のはずなのだが、彼女をよく知るカナコには、やんわりとアサトを糾弾しているように感じられた。

ツバキ・タカチホ。

セミロングの黒髪を左側でサイドポニーにした、カナコの後輩である。小学五年生然とした小柄な容姿なのだが、その可愛らしい見た目と、大人びたというより、むしろ達観した性格のギャップが人気だったりする。

「わたし、お兄ちゃんにだったら触られてもいいよ。でも、優しくね……?」

恥じらうような表情で、もじもじと言うのはベアトリーチェだ。上目遣いも忘れないあたりが、徹底されていてあざとい。突然だったとはいえ、先ほどのカナコへの対応とはまるで違う態度である。

「アサト！」

やみひめは判りやすく立腹な様子で。

たちほな  
「橘さん……?」

ツバキは穏やかだが妙な圧迫感を伴って。

「お兄ちゃん♪」

ベアトリーチェはあざといくらいに猫なで声で。

それぞれがアサトに迫る様子は、まさに三者三様だった。

高校生の少年が、年端もいかない少女三人に囲まれている。その光景は、年の離れた妹達にじゃれつかれている兄といった印象で、微笑ましくはあっても、目くじらを立てるようなものではない。

ない、はずなのだが……。

「——橘たちほなさんは随分と小さな女の子から好かれるんですね?」

カナコが何気なく発した言葉に、時が止まった。

その場にいる誰もが感じたのだ。カナコの言葉に、怒りとも悲しみとも知れない、形容しがたい感情が満ちていた事を。

……………。

誰も口を開かず、それどころか微動だにしない。この空間に満ちた正体不明の圧力に、カナコを除く全員が極度の緊張状態になっていた。

気まずい沈黙が続く。

カナコもまた、タオエンやアサトと同じく、表情が豊かな方ではない。だが、今の彼女の表情は、完全な『無』だった。下手な事を言えば、カナコがどんな行動に出るか予測がつかない。大袈裟おおげさなどではなく、今のカナコなら何をしてもおかしくない。

そう思わせる完全な無表情だった。

そこへ――

「――ごめんね、待たせちゃって。クラウの適性検査は終わ……どうしたの？」

談話室に戻ってきた金髪の女性――ロゼット・コダールは、室内の空気がおかしい事に気付き、言いかけていた言葉を中断した。

「……………」

その隣では、やはり同じ疑問を感じたのだろう黒髪の少女――クラウ・P・ブランが、きよとんとした表情を浮かべていた。

第二十一話

『ソレゾレノジジョウ』

クラウとロゼットが談話室に戻る少し前、二人は〈L. C. ファクトリー〉の地下保管庫にいた。クラウの〈機獣少女〉としての適性検査の結果が良好だったため、MBデバイスとの『お見合い』をするためだ。

「〈機獣少女〉の適性を認められた者が、愛機となるMBデバイスを見つけるための儀式――それが『お見合い』である。」

「〈機獣少女〉の武器であり、MBジャケットを展開するための装置でもあるMBデバイス。それは機獣のコアの欠片かけらが納められた、いわば機獣の分身でもある。機獣と搭乗者に相性があつたように、MBデバイスと〈機獣少女〉にも相性が存在する。」

基本的には〈機獣少女〉が契約を望み、MBデバイスが可否を決めるため、人間側に決定権はない。つまり、MBデバイスに認められなければ、どれだけ適性があつても〈機獣少女〉にはなれないのだ。

「今、うちにあるのはこれで全部。とりあえず、順に見ていって」

保管庫の扉を開け、室内の照明を灯しとも、壁の操作盤パネルを操作し終わると、ロゼット・コダールは朗らかに言った。

妙齢の女性である。長い金髪と青い瞳が目を引く、控えめに言っても美人だ。

印象としては大学生で、教育実習生として学校で見かけても違和感がないだろう。美人だが、人当たりの良い性格のため、近寄りにくい雰囲気はまるでない。むしろ、おっとりしている印象があるため、周囲からは過保護にされていそうだ。

なので、彼女が此処ここの最高責任者だと言われても、多くの人間は冗談だと思ってしまうだろう。若く、威厳や迫力のようなものに欠けるのだ。

だが、彼女は間違いなく〈機獣少女〉関連装備の大手メーカー〈L. C. ファクトリー〉の最高責任者である。その手に持ったマスターキーと、創始者ロゼット・コダールの名を襲名している事実が、それを証明している。

余談だが、こう見えて三十二歳である。

「は、はい……」

ロゼットに促されうなが、クラウ・P・ブランは緊張した面持ちおもで答えた。

長身の少女である。見た目通りなら高校生くらいだが、服装や化粧によつては、二十代だと言われても通用するだろう。老けているという意味ではなく、大人びているのだ。長い黒髪の一部には白いメッシュが入っていて、瞳の色は真紅というパンキッシュな特徴もあり、ロゼットとは真逆の、美人特有の近寄りがたさが前面に出てしまっている。

だが、実際にはまだ小学六年生である。

周囲からはクールに見られているが、それも話すのが得意でないだけ。容姿にコンプレ



ックスがあるため、普段は出来るだけ自己主張しないようにしているのだが、その様子を『孤高』とか『一匹狼』のように誤解されてしまうという悩みを抱えている。

「……………」

クラウは入口から近い順に、設置されているMBデバイスを見ていく。イメージとしては貴金属や高級腕時計の店のショーケースを眺めている気分だ。一つ一つ大事に保管されていて、すぐ目の前にあるのに、手を触れる事は出来ないような。

「……………」

設置してあるMBデバイスはどれも綺麗で、待機状態のそれらはアクセサリのような。手で握り込んでしまえば隠れてしまうくらいのサイズでありながら、しかし、確かな鼓動のようなものを感じる。

生きている——そう思わせる何かがMBデバイスからは感じられる。

「どうだった？」

ロゼットが訊ねる。一つ目のスペースには八個のMBデバイスがあったが、この保管庫に通される前に言われたような感覚を、クラウは感じなかった。ロゼット曰く、自分に合ったMBデバイスがあれば、〈機獣少女〉なら直感的に判るものらしい。

「そう……ふふ。クラウは面食いだね」

特別な感じがするものはなかったと告げると、ロゼットはにこにこ笑いながら、そんな事を言った。無論、MBデバイスに顔などないので、あくまで例えなのだろうが。

「じゃあ、こっちはどうか？」

頭に疑問符が浮かんでいるクラウに対し、ロゼットは楽しそうに、何処か期待に満ちた眼差しを向けてくる。それに気圧されるような形で、クラウは次のスペースに移動した。

其処には三つのMBデバイスがあり、設置の仕方は先のスペースと変わらない。

ただ、雰囲気がるで違う。MBデバイス自身が発しているような、圧倒的な存在感を感じる。

「……………」

ふと視線を横にずらすと、名前らしき表記が目に入った。

コバルトブルーのMBデバイスには『VANISH RAPTOR』 白いMBデバイスには

『RAGE WOLF』 そくて黒いMBデバイスには——

「…………ジェノ、クラウエ——」

『GENO KLAUE』——そう、表記してあった。

その名を口にした時、クラウは不思議な感覚を覚えた。

(なんだろう……ずっと前から知ってるみたいな響き——)

昔からの知り合いのような、以前にその名で呼ばれていたような、不思議な感覚。

「この三機は、創始者——本当のロゼット・コダールが造ったんだって。あ、基もとになった機獣の事だよ」

機獣というのは、かつてこの星に存在した巨大な戦闘兵器の総称。時代が変わり、機獣は〈ジェネレーター〉という発電施設に組み込まれ、それを拒否した個体は休眠施設で眠りに就いた。だが、〈カタストロ〉と呼ばれる敵性体が出現した事で、再びその存在が必要とされた。

大まかにだが、クラウはロゼットからそう説明を受けていた。

「この三機には、嘘か本当か判らないような開発秘話が残ってるくらいだから、相当、とんでもない機獣だったんだろうね」

クラウの隣に並んで、三機のMBデバイスを眺めるロゼットの口調と表情からは、様々な感情が窺うかがえる。偉大な創始者への敬意。

かつて存在した機獣への憧れ。

それを新たに造り出す事が出来ない、技術者としての悔しさ。

他にも、思うところはいくらかもあるのだろう。

「この〈ジェノクラウエ〉っていうのが最初に造られたらしいよ。何度か改修が施されたとか、実現出来なかった強化プランがあったとか、資料を見る限り、かなり思い入れが強かったんだろうね」

「……………」

ロゼットの言葉が、まるで創始者であるロゼット・コダール本人の言葉のように聞こえた。根拠はないが、きつと当代のロゼットのように、綺麗で優しい女性だったのだろう。

「そういえば——〈ジェノクラウエ〉っていう名前、クラウに似てるね」

「——」

ロゼットの言葉に、クラウの中で何かがトクンと跳ねた。

ロゼットにしてみれば、しんみりとさせてしまった空気を和ませようとしたただけだったのだろうが、その何気ない一言は、クラウの心をざわつかせた。

「〈ジェノクラウエ〉……クラウ……」

愛機になるかもしれないMBデバイスと、自分の名前を呼び比べるクラウの表情を見て、ロゼットは答えの判り切った質問をした。

「希望の相手は見つかったかな？」

「はい……！」

黒いMBデバイス以外の選択は、クラウにはありえなかった。



クラウとロゼットが、おかしな空気になっていた談話室に戻り、とりあえず事態の収束が完了すると、一行は談話室を後にしていた。

クラウのMBデバイス起動試験のため、カナコ、ツバキ、ベアトリーチェ、やみひめ、そしてクラウ自身の五人は演習場へ。

アサトとタオエンは、ロゼットと共に管制塔へ。

二組に分かれて移動していた。

「ねえ、ベアトリーチェ」

「なに、やみ子ちゃん？」

先頭を歩いているカナコの耳に、すぐ後ろを歩いている二人の少女の会話が聞こえた。やみひめとベアトリーチェだ。クラウはこれから行う試験に緊張しているのか、会話にわかっておらず、カナコの隣を歩いているツバキも同じくだ。

「タオエンは戦わないの？」

「タオ姉<sup>ねえ</sup>の能力は、直接戦闘には向かないというか、どっちかという補助系だから」「そうなんだ。あの時も、たしか人が近寄らないようにしてくれてたんだよね？」

「地球で初めて会った時の事？ そうだよ」

地球での事はツバキから聞いている。クラウから切り離れた（カタストロ）が逃走しようとした時、ベアトリーチェが現れたらしい。先の会話と総合すると、その際もタオエンは戦う姿を見せていないようだ。

「やみひめさん達は順応が早いですね」

背後の会話を聞くともなしに聞いていると、隣を歩いていたツバキが言った。互いの呼び方が変わった事を指しているのだろう。

先の談話室での一件——カナコにしてみれば、あまり思い出したくない——の後、やみひめとファフロウ姉妹の間で相談が行われていた。なんでも、ファフロウ姉妹の近い知人に『ヤミヒメ』という人物がいるらしく、流<sup>るとお</sup>遠やみひめを『やみひめ』と呼ぶ度にモヤモヤしていたらしい。なので、ファフロウ姉妹は彼女を『やみ子』と呼び、自分達の事は呼び捨てでいいという結論に落ち着いていた。

「そうね。私には無理だわ」

他人とこども容易く打ち解けるコミュニケーション能力がない。単純に性格の問題かもしれないが、そう簡単にフランクな態度で接する事など、出来るはずがない。

カナコにしてみれば、羨ましく思う反面、信じられない気持ちの方が強い。なぜ、それも簡単に他人を受け入れられるのか、理解に苦しむ。

カナコの心情を察したのか、ツバキは黙って苦笑を浮かべた。

すると――

「――あら。〈戦姫〉と〈難攻不落〉がお揃いで」

と、不意に声をかけてくる者がいた。〈L.C.ファクトリー〉の正面口を出た直後の事だ。その挑発的な声音からは、相手が友好的な感情を持っていない事が、ありありと伝わってくる。

カナコは立ち止まると、無言で声の主に視線を向ける。

少女だ。

年齢はカナコと同じくらいだろう。一般的な女子高生といった身長と体格で、容姿に関して言えば整っている部類だ。

切れ長の双眸は薄い緑色で、長い髪は明るい茶色。

カナコの飾らない静謐な美しさとは対照的な、自分の存在を強く主張する、派手な印象の少女である。

「……………」

カナコはなおも無言。少女と目を合わせてはいるので、無視している訳ではないようだ。

ちなみに、〈戦姫〉というのはカナコを指しており、〈難攻不落〉であるところのツバキは、カナコに倣って黙っている。同調しているというより、先輩が黙っているので、自分が先に口を開く訳にはいかない――といった様子だが。

「……………ちつ。なんとか言いなさいよ」

声をかけた二人が無言な事に対し、少女は苛立ちを隠そうともせずと言った。

先ほどまでは不敵な笑みを浮かべていた顔が不機嫌に歪む。整っているが故に、その表情はより強烈な印象を見る者に与える。

「今、舌打ちしたよね？」

「う、うん……………」

「ライバルキャラ登場かな？」

背後から聞こえるやみひめ、クラウ、ベアトリーチェの声にはあえて答えず、カナコは目の前の少女に应对した。

「二つ名で呼ばれたから、私も二つ名で返そうと思ったのだけど……ごめんなさい、なかなか思い出せなかったものだから」

普段通りの無表情で、淡々と話すカナコ。

「……そう。で、そろそろ思い出せたかしら？」

余裕がある風を装ってはいるが、それが強がりである事は背後の三人にもバレているだろう。完全に少女の表情が引きつっている。

「なんだったかしら？ たしか……〈竹槍〉？」

「〈ロングヌス〉じゃありませんでした……？」

明らかに思い出す気がないカナコと、真面目に思い出そうとしているが確信が持てない様子のツバキに、少女の表情が増々、不機嫌になっていく。

「〈魔槍〉よ！ あんた達、本っ当に腹立たしいわ!？」

怒髪天を衝く勢いで少女が怒鳴った。相当、頭にきているらしく、今にも掴みかからんばかりの形相だ。

「あ、すみません……」

律儀に謝罪の言葉を告げるツバキを庇うように、一步前に出たカナコが悪びれる様子もなく言い放つ。

「仕方がないでしょ。あなたが勝手に自称しているだけの二つ名なんて、覚えていられないもの」

そう。カナコの〈戦姫〉、ツバキの〈難攻不落〉は、自然に広まった真正銘の二つ名だが、少女——キリエ・ソウマの語る〈グングニル〉とは、完全に自分発信なのだ。

「どうせ、『ソウマ』と『魔槍』をかけているんでしょうけど……中二病すぎて痛々しいわ」

カナコは最後に、これ見よがしに盛大に溜息を吐いた。普段であれば嫌味も陰口も涼しい顔で受け流す彼女にしては、珍しく感情的な行為だ。

だが、それも致し方ない。カナコ達は事あることにキリエに絡まれており、うんざりしているのだから。

「あの、カナコさん……そのくらいで」

ツバキが困ったような表情をしているのを見て、カナコは視線をキリエに戻し、ギョツとした。彼女が目を真っ赤に腫らして、ボロボロと泣いていたからだ。

「……泣かないでよ」

「泣いてないわよ!? ううっ……あんたなんて死ねばいいのにッ!」

吐き捨てるように言うと、キリエはカナコ達を大きく迂回してへL.C.ファクトリーに駆け込んだ。

「……………なんなのよ!」

キリエの姿が見えなくなった正面口を見つめ、カナコは微妙に居心地悪そうに独りごちた。

「カナコって、実はいじめっ子?」

「なんでよ。どう見ても、絡まれてたのは私達でしょう?」

ニヨニヨと意地の悪い笑みを浮かべるベアトリーチェに、カナコは平然と返す。

「あの人も《機獣少女》なの?」

「はい。実力も実績もある方かたなんですけど、ほんの少し性格に難があるというか……!」

やみひめの疑問に答えたのはツバキだ。控えめな彼女らしく、悪く言わない表現を探したのだろうが、結果的に言葉尻を濁すしかなかったようだ。

『グングニル』って、北欧神話に出てくる槍やりの名前ですよね?」

「神話の名前までは知らないけど、多分、そうでしょ。彼女はキリエ・ソウマ。さつきも言ったけど、自分のファミリネームを『魔槍まそう』とかけてるのよ」

クラウの質問にカナコが答えた。

「それに、『中二病』って……此処ここは本当に地球じゃないんですよ?」

疑問が次々と浮かぶクラウ。

それはそうだろう。別の惑星に転移した事すら信じがたい出来事なのに、其処そこに地球人と変わらない姿の知的生物がいて、しかも日本語が通じ、文化様式も日本と似通っている。

ひよっとしたら、これは壮大なドッキリで、此処は地球の何処どこかなのではないか? そんな風に思っても仕方がない。

その一方で、クラウ自身も此処が地球でない事を、本能的に理解ふししている節がある。だからこそ、此処が別の星である確証が欲しいのだろう。

「ゼヘナには大昔、地球人が移り住んでいて、今のゼヘナ人は地球人との混血なのよ。だから、地球から持ち込まれた文化や伝承は多いわ」

「地球人が……?」

初等教育の授業でも習う、ゼヘナの歴史である。地球では同様の事を教えていないのだろうか、カナコは疑問に思ったのだが――

「カナコさん、ブランさん、その話は状況が落ち着いてからにしましょう」

互いに疑問の表情を浮かべるカナコとクラウの間に入ったのはツバキだった。恐らく、

彼女は何か事情を知っているのだろうか——そう判断し、カナコは「判ったわ」と告げた。

「ブランさん、此処ここが地球でない事の証明になるとしたら、あの二つの月くらいしか今はありません」

ツバキの見上げる先にある、二つ並んだ真昼の月。たしか、地球には月は一つしかないらしい。ツバキはそれを実際に見てきたのだらうと、カナコは想像した。

「私もね、此処が地球じゃないって、まだ実感が無いんだ」

「やみひめ……」

「でも、それはゼヘナに来て、懐かしい感じがしたからかもしれない。経験はないけど、故郷を離れて帰ってきたら、こんな気持ちになるのかもって、そう思った。クラウも、そうなんじゃない？」

「やみひめも？ そうなんだ……私の気のせいじゃなかったんだね」

どうやら、地球から来た二人はゼヘナに対し、何か同じような感覚を覚えていたらしい。

五年より前の記憶がないため、現在す住んでいるオオミヤ・シティに対しても故郷という印象が薄いカナコには、彼女等の言う感覚がまるでイメージ出来ない。

だが、同じ身の上で、同じ感覚を共有出来る者がいる安心感からか、とりあえずでもクラウの中にある疑問や不安は和やわらいたようだ。

「そろそろ行きましょう。ロゼット達は管制塔に着いていると思うわ」

「はいー！」

カナコが言うと、一同を代表するようにベアトリーチェが答えた。その脳天気とも呼べる明るい声こわね音に、微妙になつていた空気が緩和され、口にこそ出さなかったが、その場の誰もが救われていた。



演習場は思いのほか広く、サッカーのグラウンドを横に二つ並べたくらいの面積があった。とはいえ、芝生しばふが敷かれている訳でもなければ、アスファルトなどで舗装してある訳でもない。印象としてはゼヘナに転移した際に見た荒野と変わらないが、周囲を囲うように一定間隔で、電柱や照明装置のような物が設置してある。カメラやセンサーなどの観測装置らしい。

『——みんな、通信は届いているっ。』

やみひめが右手に握っている黒い剣から、女性の声がスピーカー越しに響いた。管制塔にいるロゼットの声だ。

演習場に着くと、すぐに〈機獣少女〉達はMBジャケットを展開し、通信の設定を行った。やみひめのMBデバイスは出自が特殊だが、規格自体はそう変わらない。ベアトリーチェに至っては、〈機獣少女〉ではないのでMBデバイスすらないが、これも通信機をすでに持たされているので問題はなかった。

『良好よ』

『ツバキ・タカチホ、問題ありません』

『わたしも聞こえてるよ』

ロゼットの呼びかけに、カナコ、ツバキ、ベアトリーチェの順で返信が届く。

「私もちゃんと聞こえています」

『うん。こっちも全員分、ちゃんと聞こえてる。通信は問題ないみたいだね』

やみひめの返信を確認すると、通信機越しにロゼットの満足げな声が届いた。やみひめの声も、カナコ達の通信機に届いているはずだ。

『みんな疲れてるだろうし、やみひめとクラウは特にごめんね。本当なら、起動試験は明日にしてあげたいんだけど……』

やみひめ達がゼヘナに來たのが数時間前。何をした訳でもないが、特殊な状況に置かれているストレスを考慮すれば、ロゼットが申し訳なきようにするのも頷ける。ベアトリーチェはタオエンと共に自分達を案内してくれており、カナコとツバキに至っては、アサトを見つける以前に戦闘を行っているらしい。この場にいる誰もが、それぞれに疲弊しているのだ。

「私は大丈夫です。クラウは？」

やみひめが自分のMBデバイスである〈ヤタガラス〉に向けて答え、すぐ隣にいるクラウに水を向けた。クラウのMBデバイスは未契約のため、通信機能を使えないのだ。

「私も問題ありません。出来る事は、出来るうちにしておいた方がいいと思うし」

膠着状態とはいえ、それは何かきっかけがあれば、容易く崩れてしまう可能性を孕んでいる。明日必ず、起動試験を行える保証などない。ならば、クラウの言う通り、出来るうちに済ませた方が得策だろう。

『そうだね……ありがとう』

ロゼットが少しだけ、しみじみとした口調で言った。

『みんな、元気だね。いいなあ、若いって』

……………。

ロゼットが何気なく言ったであろう一言に、空気が微妙に張りつめた——ような気がした。



ロゼットの言葉に、特に何か意味があるようなニュアンスは含まれていなかった。しかし、見た目にそのような印象がなくなるとも、ロゼットが三十二歳だという事実を全員が知っているため、この手の発言に周囲が神経質になるのは仕方あるまい。

『じゃあ、そろそろ始めようか』

通信機越しのため、空気の变化が伝わらなかったのか、何事もなかったようにロゼットが告げた。やはり、何気なく言っただけで、特別な意味などなかったのだろう。やみひめとクラウは互いに無言で頷き合い、そう結論付けた。

『了解。流速るとおやみひめは所定の位置へ。その後、クラウ・P・ブランはMBデバイスの起動試験を開始して』

演習場での指揮はカナコに任されている。その彼女の指示を受け、やみひめはクラウをこの場に残し、移動する。

「クラウ！」

途中で立ち止まり、やみひめはクラウに向かい振り返った。

「大丈夫だよ！ 何かあっても、私達がいるから！」

「やみひめ……うん！ ありがとう！」

クラウが大きな声を出すのは珍しい。距離があるからというものもあるだろうが、それだけでないのは、彼女の表情を見ればやみひめにも伝わった。

改めて思う。

クラウは見た目は大人っぽくて美人さんだが、笑うととても可愛らしい——と。

『三人とも、準備はいい？』

やみひめが所定の位置に到着すると、カナコから起動試験開始の準備確認の通信が届いた。各々がそれに応え、カナコが管制塔にいるロゼットに準備完了の旨を告げる。

このまま何事もなく、無事に起動試験が終わればいい。

周囲に設置してあるスピーカーから流れる、開始の合図を聞きながら、やみひめはそう願った。

クラウを中心に、やみひめ、ツバキ、ベアトリーチェが、正三角形の頂点にいる位置関係で、カナコはその頂点よりもっと離れた後方にいる。状況を把握しやすくするためだろう。

開始の合図を聞き、クラウが右手を胸の位置に上げた。その拳こぶしには、MBデバイスが握られているはずだ。

「……」

クラウの衣装が変わった。距離があるため起動言語スタートインク・ヴォイスは聞き取れなかったが、M

Bジャケットを展開したのだ。

「でも、あれって……」

やみひめは、クラウのMBジャケットに見覚えがあった。黒を基調とし、白がアクセントとして加えられた、ドレスのようなデザイン。背には一对のウイング・ユニット。そして、両手には巨大な爪を思わせる手甲……。

見覚えがあるどころではない。

それはクラウが、〈カタストロ〉に意識を奪われていた時の姿そのままだった。

つづく

## あとがき

どうも、流遠亜沙るとおあさです。

『機獣少女ジイカルやみひめ The NOVEL REVIVAL』第二十一話をお届け致します。

今回、本当は戦闘シーンがメインの予定で、アバンも戦闘シーンを書きました——が、思いのほか間のシーンが膨らんでしまい、導入パートまでしか書けなかったため、戦闘シーンはまるごと次回に持ち越しとなりました。

今回のポイントとしては、三機のM B<sup>3</sup>バイス『GENO KLAUE』『VANISH RAPTOR』『RAGE WOLF』の登場でしょうか。このサイトで読んでくださっている方は、説明は不要ですよ？

あとは新キャラ、キリエ・ソウマ。彼女は今後、かなりの事をやらかしてくれる予定なので、ご期待ください。

それでは謝辞を。

まずはクラウとロゼットを始め、ネタを使わせていただいた紙白さんに感謝を。次回はクラウが大活躍の予定なので、いつも以上にチェックをよろしくお願い致します。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。

小説なので地味な部分ばかり膨らみます。けど、小説だから仕方ないよね？ それに、バトル要素もあるけど、メインはそこじゃないから、特に求められてないよね？ と、開き直ったり、ちよっと卑屈になってみたりもするけど、あたしは元気です。

……『ゾイヤミ』の読者は何を求めているのだろうか？

2016 / 12 / 10 流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ジイカルやみひめ The NOVEL XXXXXX 第2部』小説ページに戻る